



08

* News Letter *

結晶母

Terra Renaissance

季節をかさねて、春。

希望をつむいだ10年 未来につながる ひと針の力



——東日本大震災から10年、私たちは震災と復興を見つめ、寄り添い続けてきました。復興支援としてはじまった「大槌復興刺し子プロジェクト」のこれまでを、本事業部長の吉田と、アフリカ事業マネージャーの鈴鹿との対談から振り返ります。

吉田 大槌復興刺し子プロジェクトは、岩手県大槌町で刺し子を施した商品を作り、販売している事業です。東日本大震災で被災された方々の収入源の創出と針仕事による心のケアを目的にスタートしました。

プロジェクトは東京からのボランティアチームが2011年6月に立ち上げ、テラ・ルネッサンス（以下、テラルネ）は同年8月にプロジェクトの運営母体となりました。

復興支援に関わると決める以前、未曾有の大震災に対してどんな復興支援を行うべきか、私たちの中には迷いがありました。そんな時、ウガンダ事務所のスタッフやこれまで支援してきた元子ども兵の皆さんが生活費の中から募金を集めてくださり、日本に届けてくれたんです。その額は、現地公務員の月給の

いるエピソードなどはありませんか？

鈴鹿 刺し子さんから「刺し子をやっている心が落ち着いた。やって良かった」と言っていたことが記憶に残っています。手仕事によって被災による心理的なしんどさが和らいだり、刺し子をやりがいや生きがいにしてくださっている姿は本当に嬉しく、ありがたい気持ちでした。

それから、集う「場」や仕事があると皆さん本当に大きな力を発揮されるんです。刺し子さん同士が仲良くなつて団結してくるとそれはもうパワフルで。僕のほうが元気をもらっていたとよく覚えています。

吉田 確かに、震災前はお互い知らなかったけれど、プロジェクトを通して知り合ったという方も刺し子さんの中には結構いらっしゃると思います。刺し子会やお茶っこを通じて自分のコミュニティが広がったという声も聞いていますね。手を動かすことの心理的効果と同時に、人のつながりを新しく結ぶところにもこのプロジェクトの効用があったのではと感じています。

鈴鹿 僕たちも刺し子さん同士が仲良くなれるように意識をしていましたし、繋がる場を作れたのは良かったです。

商品制作の一方で、その販売



1



2

8倍以上でした。そんなウガンダの方々から気持ちの後押しも受け、本格的に活動を開始しました。

現在は30名前後の刺し子さんが活動してくださっており、これまで200名以上の刺し子さんがこの事業に参画してくださいました。お渡しできた刺し子代（工賃）も総額で約3900万円に上ります。

鈴鹿さんは現在ウガンダ駐在ですが、テラルネに入職した当初は、大槌復興刺し子プロジェクトの担当でしたよね。当時の様子など覚えていますか？

**はじまりは、
体育館の一角から**

鈴鹿 僕の着任はプロジェクト開始の半年後、2011年11月でした。当時は大槌町内に事務所がなかったため、体育館の一角（写真[1]）や集会所を借りて刺し子会を行っていました。毎回会場を予約して、刺し子さんたちに場所と日時を共有したり、東北はすごく寒いので、刺し子会の日には先に会場に行つてストーブをつけて会場を暖めないといけなかったことなどを思い出します。

吉田 鈴鹿さんが大槌に赴任されたのは復興支援がはじまつて初期の頃ですが、心に残つて



[2] 刺し子さんに刺し子の材料と工賃を渡す鈴鹿 (写真左) [3] 完成した刺し子Tシャツを嬉しそうに見せてくれる刺し子さん [4] 右からパティーズの佐々木(加)、事業部長の吉田、パティーズの黒澤、佐々木(静) [5] 2016年に発生した熊本地震の際、新商品を寄付つき商品として販売し支援金とした [6] 刺し子の伝統柄が印象的な「くるみボタン」



刺し子が刺し子さんに寄り添っているような感覚でした。

鈴鹿 「刺し子が刺し子さんに寄り添う」という感覚はとても興味深いです。テラルネは支援活動において「自立と自治」を大切にしていますが、これはつまり僕たちの支援の成果が、地域やそこに暮らす人々の日常に根付いていくことだと思っています。一つひとつは小さな活動でも、少しずつ支援対象者の生活が変わっていく。これは海外支援でも復興支援でも共通していたのだなと改めて思いました。

刺し子さんたちの中で「復興」への意識に変化はありますか？

吉田 刺し子さんも私たちスタッフも、商品制作の中で「復興」を意識することは少なくなったように感じます。売り場が変わり、「復興」を全面に出すよりも刺し子の技術を見せる商品も増えました。刺し子さんたちもそこに力を入れ、誇りや自信を持って制作をしてくださっているのが良い意味で「復興」への意識が低くなっているかもしれません。

同時に、自分たちが経験しているからこそ被災地への思いは強くなっていると思います。国内で大規模な災害が起きたとき「震災であれだけ助けしてもらったからお返ししたい。お互い様だよな」という声が自然とあが

はプロジェクトを立ち上げた東京のボランティアチームに助けをいただきました。震災後は首都圏での復興関連のイベントも盛んだったのでその機を逃さず販売できたのはありがたかったです。

吉田 皆さん、復興の時期が過ぎても商品が広く受け入れられるように商品企画をしてくださっていましたよね。商品のデザイン性も高く、それが多くの人に届いたきっかけの一つだったとも思います。そんな力を糧に大槌刺し子は最初の5年間で飛躍できたと思っています。

地域に、生活に根付く大槌刺し子

吉田 私は前任者の後任として2015年にプロジェクトマネージャーに就任しました。当時、講師をお呼びして技術講習会を行ったり、伝統柄を使った商品に挑戦したりと新たな試みを進めました。「復興」の目的だけでなく、商品の品質や手仕事の価値を見ていただきたいという思いがスタッフや刺し子さんの中に芽生えていたからです。

販路の開拓にも取り組みました。少しずつ百貨店の催事への出展や企業との協働が実現し、技術の向上と同時に刺し子さんの自信にもつながっていったよ

うに思います。

実のところ刺し子は東北地方の伝統工芸であるものの、大槌町で現代まで根付いていた訳ではないんです。それが今、大槌町のふるさと納税の返礼品として大槌刺し子の商品を取り扱っていただいたり、岩手県の「いわての文化情報大事典」というサイトにも大槌刺し子が紹介されています。プロジェクトを10年続けてきて、少しずつ大槌に根付いてきたんだなと思うと本当に嬉しいですね。

鈴鹿 大槌刺し子が変わって行く様子は僕も感じていきます。現地でパティーズ(岩手事務所のスタッフ)が活動の主軸を担うようになってきているのも大きな変化ですね。

吉田 そうなんです。私が岩手事務所の駐在を離れたこともあり、今は3人のパティーズが連携して発送や生産管理を担ってくれています。体制として大きい変化ですし、3人の成長が感じられる部分です。

刺し子が刺し子さんの生活の一部になったとも感じます。例えば、プロジェクトの初期の頃から参加して下さっている刺し子さんが、刺し子で貯めたお金で寝具一式を新調されたそうなんです。その話を聞いて、この活動が刺し子さんの生活を下支えしていると実感しましたし、

るんです。実際これまで日本各地の震災や豪雨災害に寄せて、募金活動や商品売上の一部を被災地へ寄付する取り組みを行いました。

鈴鹿 これは非常に印象的な動きでしたよね。東日本震災支援のはじまりがウガンダからの募金であったように、かつて被災を経験した刺し子さんやパティーズが同じように被災した方のために行動する。支援のパトンが繋がっていく様子が印象的でした。

吉田 反対に変わらないことというのと、刺し子を通じたつながりや交流の場は変わらず続いています。また大槌刺し子のビジョンでもある、「大槌を元気にしたい」「手仕事の価値を伝えたい」という思いもずっと変わらないですね。

鈴鹿 そうですね、僕も刺し子が刺し子さんの日常に寄り添うのは変わらないのかなと思っています。

ひと針が紡いだ10年、大槌刺し子の役割

吉田 大槌復興刺し子プロジェクトは発足当初、「テラルネックスからの10年以内の独立・別法人化」を目指していました。しかし、被災地や復興を取り巻く

るんです。実際これまで日本各地の震災や豪雨災害に寄せて、募金活動や商品売上の一部を被災地へ寄付する取り組みを行いました。

鈴鹿 これは非常に印象的な動きでしたよね。東日本震災支援のはじまりがウガンダからの募金であったように、かつて被災を経験した刺し子さんやパティーズが同じように被災した方のために行動する。支援のパトンが繋がっていく様子が印象的でした。

吉田 反対に変わらないことというのと、刺し子を通じたつながりや交流の場は変わらず続いています。また大槌刺し子のビジョンでもある、「大槌を元気にしたい」「手仕事の価値を伝えたい」という思いもずっと変わらないですね。

鈴鹿 そうですね、僕も刺し子が刺し子さんの日常に寄り添うのは変わらないのかなと思っています。

ひと針が紡いだ10年、大槌刺し子の役割

吉田 大槌復興刺し子プロジェクトは発足当初、「テラルネックスからの10年以内の独立・別法人化」を目指していました。しかし、被災地や復興を取り巻く

「心が落ち着く『気持ちのヨガ』、私だけの幸せな時間。」

震災があった当時、私は大槌にいました。津波が来る前に家族の無事を確認できたので幸いでしたが、家はもう流されてダメだったんです。避難所から仮設住宅を経て5年ほどした頃、新しい家を再建することができました。

大槌刺し子をはじめたのは2017年の6月頃からです。きっかけは、刺し子をしていたお友達からのお誘いでした。仮設住宅もでて家にいるし、仕事を広げるスペースもあるからやってみようかなと思って。

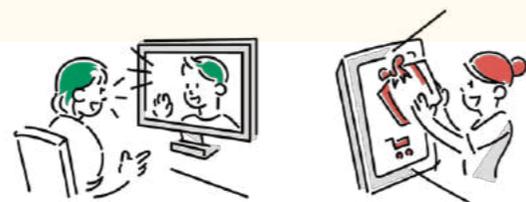
以前から和裁の仕事をやっていたので、針と糸は身近な存在でした。やっぱり針と糸はいいですね。刺し子をやっていると、気持ちのヨガじゃないですけど、刺すことで心が落ち着くし、気持ちのバランスを保つことができます。30分でも1時間でも、刺し子をしているときは純粋に私だけの時間なので幸せですよ、贅沢だなあって思います。

震災後は、なにか作るといっても子どものズボンの裾上げとかそういったくらいで。でも、いつかは和裁の仕事に戻りたいなあと思っていたので、刺し子の仕事ができ、今とても嬉しいです。たまに刺し子の皆さんに会って「しばらくだねえ」と声をかけたりします。べったりした関係でもないけど、繋がりが持てていることは、私にとって良いことです。その意味で、私にとっての刺し子は「欠かせないもの」なんだと感じています。

大槌刺し子には末永く続いてほしいですね。「あそこのだったらいいよー、間違いないよー」と言えるような。そのために、これからもひと針ひと針、気持ちを込めて刺していきたいです。



鎌田 真樹子さん



大槌刺し子の公式サイトでは、商品の販売をはじめ、活動の様子がわかるスタッフブログを更新しています。ぜひご覧ください！

大槌刺し子

検索

<https://store.sashiko.jp/>



状況を踏まえ、方針を変更。震災から10年を迎える2021年3月以降もテラルネの事業として継続することにしました。また事業名称も「復興」の文字を取り「大槌刺し子」として、新たにスタートします。

10年目を迎えるにあたり、改めて刺し子の可能性を感じているところ。例えば、刺し子はもともと物を大切に長く使うために発達した技術ですが、この「物を大切にする文化」は現代の価値観でいう「サステナブル(持続可能)な生活」に通じています。また、この事業の「小さな商い」としての可能性も重視しています。高齢の方も参加できるような小さなビジネスを地方で続けることは地方創生にもつながっていると考えられています。持続可能な社会の実現のためには、事業に対する「共感」と、あるもので満ち足りるという「充足」がキーワードになると思っています。商品を通じて、大槌刺し子を持つ意味や意義を社会に広げていきたいです。

鈴鹿 僕も同じ考えです。この事業は、大量生産・大量消費・大量廃棄のシステムとは真逆のものづくりです。私たちの日常のいたるところに社会のひずみが出ていて、「足るを知る」という価値観やエシカル(倫理的)な消費行動が必要だと感じています。

大槌刺し子はそのマインドを社会に提案し、ともに考えていけるような商品であり活動だと思えます。また、社会を変えるには一つひとつの地域でできることを積み重ね、地域そのものが強くしなやかになる必要があると思っています。大槌刺し子はその一つの事例になりえるのではないのでしょうか。

先日、吉田さんから聞いたお話ですが、あるバディーズのお子さんが「将来は大槌刺し子で働きたい」と言ってくれたそうですね。これを聞いたとき本当に嬉しかったです。大槌刺し子が世代を超えて、大槌の人たちを巻き込んで続いていくと良いなと思います。

吉田 地域自体がしなやかに、というのはテラルネの価値観である「自立と自治」にもつながる非常に重要な視点ですね。

私はこの10年間で「ひと針の力は侮れない」ということを学びました。大槌刺し子は「ひと針ひと針が未来に繋がる」ということを体現してきたプロジェクトだと思えます。「ひと針」が関わる人の希望を紡いだ10年で、2021年から新たにスタートを切りますが、今後も大槌刺し子の社会的意義を追求し続けていきたいと改めて決意しています。(構成/守山瑞希)

活動レポート

ラオス事業プロジェクトマネージャー 飯村浩

不発弾を回避、命を守る教育の力

ベトナム戦争時に200万トンを超える爆弾を投下され、「一人当たりの空爆が最も多い国」として知られているラオス。事業地のシエンクワン県は、ラオスの中でも最も多くの爆撃を受けた地域の一つで、今もなお多くの不発弾が残っています。不発弾による爆発事故を防ぐために、様々な機関や団体が回避教育を行っている状況です。

私たちは、これまであまり実施されてこなかった幼い子どもを対象とする回避教育支援を計画しています。これに先立ち、子どもたちはどのくらい不発弾について理解しているか、この結果によって知識や理解度がどのように向上するかを確認するための事前テストを実施しました。挿絵などを用いた資料を使用しながら、スタッフが一人ひとりに対して事前テストを行っています。さらに、ラオス政府からの強い要望をうけ当初の計画

にあった幼稚園児のほかに、小学校1・2年生も今回の支援対象に加えることにしました。

事前テストを通して明らかに増えてきたことは、幼い子どもたちを対象とする回避教育がいかに難しいかということでした。今後は、教材作りのための情報収集を進めるとともに、日本事務所や海外事務所の日本人スタッフとの連携、また回避教育のトレーナーやラオス側スタッフとの意見交換を通じて、効果的な教材を作成していきたいと思えます。



小学校で事前テストを実施した様子。絵や写真を用いて子どもの理解度を確認します。

活動レポート

海外事業部長 小川 真吾

困難にくじけず、希望を縫う女性たち

2020年11月から、コンゴの南キブ州カロンゲ区においてコロナ禍で収入が減少した紛争被害にあった女性たちを対象に、子どもの制服作りの仕事を提供してきました。以前はマスク作りの仕事も提供していたのですが、学校の再開に伴い制服のニーズが高まることから、制服作りの仕事を担ってもらうことにしました。

学校再開のニュースは喜ばしい一方で、現地の人々がコロナの影響によって経済的に厳しい状況であることに変わりはあり



ません。特に、今回制服を供与した元子ども兵や孤児の世帯は、学校が再開しても制服を買うことができない状況でした。このことから、洋裁技術をもった彼女たちに制服作りの仕事を提供し、完成した制服を小学校に通う250名の子どもたちに届けることができました。

ただカロンゲでは、コロナ禍の以前から厳しい生活を強いられている人々が多く、十分な収入が得られないために、過酷な重労働で日銭を稼いだり、危険な鉱物資源の採掘をしたりして生計を立てている女性たちがいます。むしろ、相対的にコロナの影響が小さく思えてしまうほど、彼らは紛争の影響による苦しい状況下での生活を強いられているのです。私たちはこれからも引き続き、少しでも多くの人々が安心して安心した生活を手にできるよう、カロンゲでの活動を続けていきます。



作ってもらった制服を着た子どもたちは、どこか少し大人っぽく見えます。

テラルネなひとびと

スタッフ編 鈴鹿 達二郎 *Tatsujiro Suzuka*
アフリカ事業マネージャー



ウガンダ駐在員の鈴鹿達二郎です。大阪生まれ、大阪育ちです。と言っても大学から九州だったりその後は海外(タンザニア)などで、もう関西弁も削ぎ落とされています。学生時代は、生物について学んでいました。干潟に生息する巻貝の生態についてです(←この部分、以前に出演したテレビ番組『こんなところに日本人』で少しだけ放送いただきました)。

ウガンダでは自宅の外で洗濯物についてしまうアリ(噛みます!)に頭を悩ませていましたが、なんとそのアリはマンゴーの木と共生していて、葉っぱを丸めて巣を作ったりする種類でした。このアリを時々眺めてドキドキしてお



ります。日本には年に2回ほど帰るのですが、帰るといつも日本の空港や建物の人工的な直線や平らな地面に囲まれて驚いて、半分外国にいるような気にもなります。日本食は色々美味しいですがサバの塩焼きとか大好きです。ちなみに、ウガンダにはボイルされた甘いバナナがあって、それが美味しくて本当にオススメですのでウガンダにお越しの際はぜひ試されてください!!

ファンクラブ編 山中 はる那さん
高校教諭



高校時代にテラルネッサンスの書籍を読み、大学時代には鬼丸さんの講演会にも参加しました。それらのことをきっかけに、世界情勢や子どもの人権に関心を持つようになり、高校の地理歴史・公民科の教員になりました。また、コロナ禍で子どもを授かったことで、子どもの命の尊さを日々実感しているところです。微力ではありますが、ご協力させていただきたいと思っています。

ファンクラブ会員、募集中!

1口1,000円(毎月)から、活動を応援できる「ファンクラブ会員」。情報満載の活動レポートや、海外からのポストカードなどをお届けしています。お申し込みはホームページ、またはお電話でも受付中。すでにファンクラブ会員の場合は金額変更も可能です。お気軽にお問い合わせください。

テラルネッサンス ファンクラブ 検索

電話 075-741-8786 (月-金 10時半-18時)

文・和泉羽美

2018-2019年の期間、テラルネッサンスのインターンとして活動。卒業後はソーシャル・ビジネスを通じて、そして現在はNGO職員として国際協力に携わる。

平和をめぐる冒険

- インターンシップ卒業生によるエッセイ -

私がテラルネッサンスでインターンを始めたのは、進路に思い悩んでいた大学4年生の時だった。周りの友人は次々に進路を決めていく中、留学から帰国したばかりでろくに就活もしていなかった私は、なんだか世界から取り残されたような気持ちだった。当時から国際協力に携わりたいと思っていたが、新卒の私に選択肢は少なく、またこの世界へ飛び込むことに若干の不安もあった。そんな私とテラルネッサンスとの出逢いは18歳の夏にまで遡る。

当時、私はカンボジアでの衛生教育支援活動に携わっており、活動の一環として訪れたのがテラルネッサンスの活動地だった。そしてその一年後、再度ご縁をいただき今度はウガンダの活動地を訪問した。この時、元少女兵の方のお話を聞かせていただいたのだが、それは私にとって簡単には受け止められないほどの衝撃で、強く生きる彼女に慰められる始末だった。彼女の前でただ涙を流すことしか出来なかった自分の弱さや停さを実感しつつも、やはり「この現状を変えたい」という気持ちは消えなかった。そこで私は休学をし、テラルネッサンスのインターンを通してもう一度自分と向き合う道を選択した。

そんな経緯で始めたインターンだが、この選択は大正解だったと思っている。インターン活動を通じて多くの人に出逢い、そして人生の目標を見つめられた。それから新たな発見もあった。私は啓発事業部のインターンとしてイベント運営のほかに、めぐるプロジェクト(書き損じはがきなどの物を支援に繋げる)という業務を担当していた。上司曰く、「作業が細かく丁寧だから」という理由から担当になったそうだが、実のところ私は細かい作業や単純作業が嫌いだった。だから当初、私の心の中は悲痛な叫びでいっぱいだったし、やりきる自信さえなかった。ある日は、何百枚もあるはがきを数えて仕分けしたり、またある日は、英文文献の翻訳や、講演資料を何百セットも作ったりした。だが、不思議なことに一見どれも地味で面倒なこの作業が苦にならなかった。それどころか、こうした小さな活動があつたウガンダで出会った彼女のような、まだ見ぬ世界の誰かに繋がっていくと思うと目の前の仕事に夢中になれたのだった。

私は、もともと生まれた場所や環境、性別に左右されてしまふ今の世界に対して大きな違和感を持っていたが、そこに立ち向かっていく自信はなかった。だけど、「嫌いなはずのことで夢中になれるくらい志を持っているんだ、だったら挑戦しないと確実に後悔する!」と思い、私は世界の不平等に立ち向かう決意を固めた。

その後、私はビジネスを通じた社会問題解決を掲げる会社に就職し、グアテマラにおける男尊女卑問題や環境問題解決のために働いた。そして、現在は学生時代から興味があつた中東地域において、ここで活動するNGOに職員として関わっている。不平等のない平和な世界にはまだまだ遠いかもしいないが、それでもここで学ばせていただいた多くのことを胸に、日々諦めず、一歩ずつ前に進んでいきたい。





世界の扉絵 .08

新型コロナウイルスの感染拡大による影響で、2020年は誰にとっても大変な一年でした。大槌でも神経質になる日々が続く中、「厄災を吹き飛ばそう!」と刺し子さんたちと写真撮影。「笑う門には福来たる」というように、今にも福が舞い込んできそうな良い写真が撮れました。



理事・大槌復興
刺し子プロジェクト事業部長
吉田真衣

 terra_ngo

SDGsの達成に資する優れた取り組みを行っている企業・団体等が表彰される「ジャパンSDGsアワード」において、2020年12月、テラ・ルネッサンスは本賞の「副本部長（外務大臣）賞」を受賞しました。アジア・アフリカでの「支援」と、日本国内での「啓発」の両輪で体现する「SDGs包括アプローチ」が高く評価されました。なお、本賞の受賞は京都府内では初、国際協力NPOでは3例目となります。日頃から活動をご支援いただく皆さまへ、心から御礼申し上げます。

第4回 ジャパンSDGsアワード 副本部長（外務大臣）賞、受賞



出典：首相官邸ホームページ

News Letter.08 結晶母

2021年3月 発行

発行◎ 認定NPO法人テラ・ルネッサンス

発行責任◎ 小川 真吾

企画編集◎ 小田 起世和

本書の一部または全てを複写・転載引用する際には、
予めテラ・ルネッサンス事務局までご連絡ください。

© 2020 Terra Renaissance

- 日常シリーズ・ラオス事務所の場合 -



陽のぼる
前からたくさん
のひとが!

野菜の和え物や
焼き魚が人気です

ラオスには豊富な食材がたくさん!

市場は活気があり、朝早くからたくさんの人で賑わいます